



月刊 名大文学部

第102号

発行：名古屋大学文学部
広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp

教員コラム—No.100

アジアの顕学

土屋 洋（東洋史学）

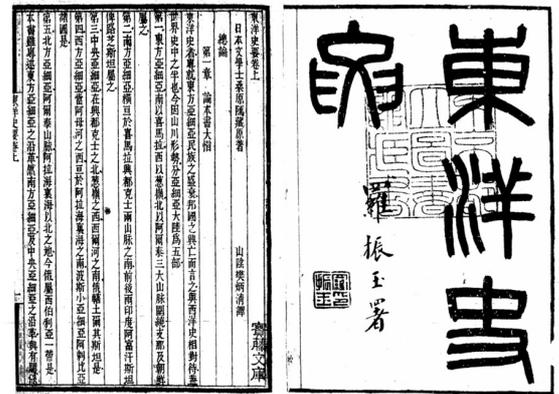
高校時代、「文学部にいきたい」と口にしたとたん、父の顔が一瞬曇り、「就職はどうするんだ」と言われたことを今でも覚えています。

そんな父の心配をよそに文学部に入学し、所属したのは東洋史学研究室でした。「またよりによって…」という声が聞こえてきそうでしたが、私の東洋史学への興味はその後ますます昂じ、大学院にまで進学しました。就職はたしかに容易ではありませんでしたが、30代半ばに台湾で職を得ることができました。

私の専門は中国近代史および日本統治時代の台湾史です。特に教育や文化の歴史を日本との関わりから探っています。歴史を繙くと、中国や台湾の歴史が、良くも悪くも、日本の歴史と密接に関係していたことがわかります。中国語の表現を借りれば、「你中有我、我中有你（あなたのなかに私がいて、私のなかにあなたがいる）」という関係です。私も文学部で、中国や台湾について学びながら、私のなかの世界を広げることができました。

昨今は街なかで中国語をはじめ外国語が頻繁に耳に飛び込んでくるようになりました。コンビニのレジにアジア人留学生が立っている光景もめずらしくなりました。こうした身近に迫ったグローバル化に対し、壁を築いてそれを遠ざけようとする人々がいることは理解できないわけではありません。ただすこし残念なのは、グローバル化に正面から向き合い、アジアの人々とうまく付き合っ、アジアを舞台に活躍したいという日本人学生があまり見られないことです。

日本から一步外に踏み出し、アジアに足を踏み入れれば、アジアについて学ぶ東洋史学は「顕学（名の知れた、勢いのある学問）」です。これからの時代を生きる若い皆さんは、ぜひ東洋史学を学んで、アジアを舞台に活躍してください。（写真は中国で翻訳・刊行された日本の東洋史教科書——桑原隲藏著・樊炳清訳『東洋史要』1899年、東京都立中央図書館特別文庫室所蔵）



分野・専門紹介—File44

テーマを多様に選定する研究の場（日本文化論・日本文化学特殊研究）



分野・専門名：日本文化学

日本文化学講座は、学部生は所属しない大学院専担の講座です。地域や学問領域をまたいで多角的に日本文化を捉え直し、積極的に研究成果を社会に問うていく大学院生・研究者を養成しています。とりわけ東アジア地域の関係性の中において日本文化の姿を捉え直す人材を育てていくことを目的とする点に特色があります。

本講座では、日本近現代文学・文化研究、ジェンダー研究、植民地文化論、出版文化論などの研究領域にわたって授業が行われています。授業の詳しい内容は、毎学期に具体的なテーマを選定し、多様性と系統性が目指されています。日本

文化論・日本文学特殊研究の授業では、近年来、空間論や物語論、身体・知覚論などの文学理論を毎学期に一つ特定し、関連する著書と論文を網羅して解説を求めています。また、2018年度は雑誌研究というテーマが設定されました。

学生は、授業を受けることで雑誌研究についての、文学研究的・メディア研究的・ジャーナリズム論的・当事者的枠組みを、関連文献を読みながら修得、理解できます。授業の内容は「ブックレポート」と「研究発表」に分けられます。ブックレポートは雑誌研究のこれまで、これからを考えるために重要な著作・文献を検討し、一方、研究発表は私たち学生自身の研究領域を題材にし、あるいは自由に対象課題を設定し、特定の雑誌について行います。授業は研究発表の場である一方、交流の場でもあります。授業の中で学生が互いに異なる観点や見解を交換し合い、交流の場を構築することができます。活発な交流によって新しい話題が湧いてきます。また、発表者は授業で多方面の意見を得ると同時に、これまで発見されていない問題点を掘り出し、研究の視野を広げることができます。(博士後期課程3年・王 占一)

分野・専門紹介—File45

いちいち考えること（西洋哲学史基礎演習）

分野・専門名：哲学

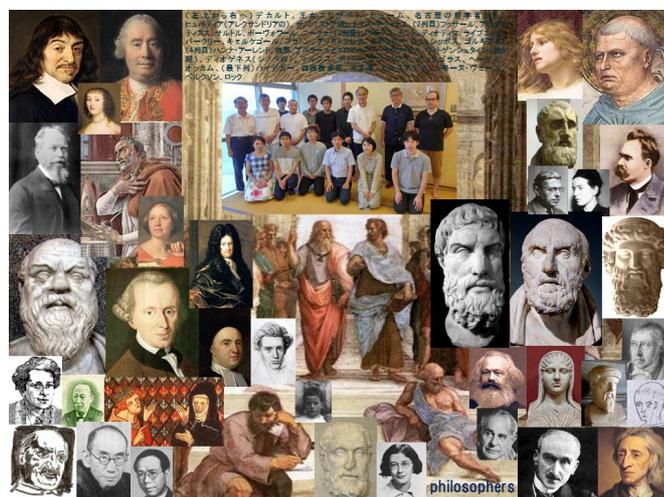
名古屋大学の哲学の授業では、外国語の本を日本語に翻訳したり、読んだ本の内容をみんなで議論したりしています。教員はもちろん、難しい本を解説してくれたりしますし、質問をしたら応えてくれます。けれどもここで一番重要なのは、みんながそれぞれ、いろいろなテーマについて、「立ち止まって考える」ということです。

人に言われたことを、きちんと理解することは、たしかに大事なことでしょう。しかし、なぜそんなことを言われているのか、不思議に思ったりしたことはありませんか？勉強の成績を上げるように言われるのはなぜ？

なぜ学校に行かなくてはいけない？良い大学、良い会社に入るようにすすめられるけど、「良い」ってなに？……などなど。こうした疑問に、「正しい答え」を出すことはできるのでしょうか。ふと思いついた「答え」も、当たり前のことだと思込まされているだけかもしれません。

ところで、当たり前のことについて、「なぜ？」と問い続けることは、忙しい社会にあってはムダなことに感じられるかもしれません。なにも考えない方が、目標に早く到達できるからです。「なぜテストを受けなくてはならないのだろうか？」と考えていたら、テストの時間が終わってしまいますよね。そんななか、哲学研究室は、ゆっくりと考えることができる(許される)場所です。急いで答えを出すように強制されません。

こんなふうに、「いちいち立ち止まって考えることができる場所」である哲学研究室には、同じように、「なぜ？」と問い続ける人たちがたくさんいます。彼らと議論をすれば、また新たな「なぜ？」が生まれるかもしれません。さて、次にすることは—いちいち考えること。(北村 和己・博士前期課程2年)



最近の文学部

猛暑の一日の終わりの楽しみ？（東山キャンパス編）

文学部棟前を東西に長く伸びるグリーンベルト。好天気の日暮れどき、西の空の真っ赤でまん丸な夕日が、遠く東の端の豊田講堂のガラスの正面に反射します。道の真ん中で思わず立ち止まり、自転車にぶつかりそうになることも。(YK)

*本紙では、名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが、それまで待てない人は...
名大文学部のWEBサイト <https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/> まで(『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります)